

大陸(中支)

六十二年を振り返りて (衛生兵)

山形県 高取 藤吉

私の出生した所は、当時は本郷村といい、昭和三十四(一九五九)年の合併で、旧左沢村、旧七軒村、旧本郷村が現在の大江町となりました。

私は高取家の五人兄弟の長男として生れ、田七反歩、畑三反歩の零細農家で、養蚕業が主な収入源で、生計は決して楽ではなく、それで旧本郷村の国民学校を卒業すると農家の手伝いをしながら、冬季間は滋賀県の東洋レーヨン会社に友達と数人で出稼ぎに行き、収入面を補っていました。秋の穫り入れが終わると出稼ぎに行くのがむしろ楽し

みでした。

昭和十九年四月 寒河江市で徴兵検査があり、第一種合格となりました。乙種合格でも早晚兵隊に行かねばならないと覚悟をしておりました。暑い夏も終わろうとする九月に役場の方が、召集令状を持って来られ「九月五日に青森の第三十一連隊に入隊せよ」との通知を受取りいよいよ来るものが来たと覚悟を決め、早速神社等に武運長久を祈りに行きました。

昭和十九年、当時の戦局は日本軍にとって正に退潮期に突入していたのでした。三月初頭捲土重来を期してインパール作戦が開始されたが、雨季を迎えた中での長征と、近代装備の英仏軍に阻止されて無残な敗退となりました。補給の食糧

も救援の手も差し延べられないまま数多くの兵士はビルマの山中で餓死していったのでした。

日本国内においては、食糧事情がますます悪化して、米穀の配給も思うように行き届かず、馬糧にしていた高粱や豆粕といった様な物が国民食として配給されていきました。

ガソリンの入手は困難を極め、松の樹脂から採取した松根油や木炭の燃焼ガスを利用して燃料の代用に当てている始末でした。

軍隊に補充される兵員の出征もかつての華やかな見送りは消えて、隠密裡に入隊させて、出国の行動は絶対に秘密化されていました。このような情況の中、九月四日、親族だけに送られて山形駅へ、途中幾人かの友人と共に青森駅へ向かいました。

駅へ着いたら雨降りで、あいにく、傘を持っていないので、皆、頭からびしょ濡れでした。ぬれ鼠のまま青森第三十一連隊に入隊をしました。九月五日でした。早速私は衛生兵として、青木班に

配属され、約一カ月本科の勉強をして、弘前の陸軍病院へ転属となり、ここで本格的に衛生兵としての訓練に励みました。

十一月下旬いよいよ戦地への出発命令が出て弘前駅を出発、下関駅へと向かいました。多分貨物列車だと思ふ、下関駅に到着したのはまだ薄暗い朝だったと思います。下関港より船に乗り釜山に上陸、ここで十日間ぐらい輸送列車を待つため退避していました。ここでの給食は内地での給食よりもすこく良かったことを思い出します。

十二月八日いよいよ戦地に向かって出発の日となりました。釜山の駅から貨車に乗り一路北上、鮮満国境を経て満支国境の山海関を通過、右手に万里の長城を眺めながら南下しました。行けども行けども広野が続き、毎日毎日の汽車行軍は辛苦そのものでした。弘前出発以来一度も洗面・入浴も無い毎日で、顔や手には垢が重なり、黒光りとなり、被服には虱がわいて、本当に大変な汽車行軍でした。

それまでは汽車行軍も無事だったのですが、ある駅に停車している時、初めて敵機の空襲を受けました。貨車の屋根のため幸いにも我々には負傷者も出なかったのですが、駅の警備隊には死傷者も出たと言うことでした。

北支の十二月と言えばかなり寒くて、凍傷兵も出たと言うので、新陽駅に着くとここで部隊は急遽野戦病院開設の命令が出て、その準備に取り掛かりました。しかし病室と言ってもベッドの替りに敷いた藁の上に毛布を敷いて、これが戦場の病室という物でした。ここで凍傷兵及び負傷者の治療看護をしていました。今度は南進の出動命令が出て、徒歩で武昌、漢口へと行軍でした。武昌を出発してから幾日歩いたことだろう。昼間の行軍は敵機の襲撃があるのでほとんど夜行軍でした。雨上りの行軍路は悪路で、夜はとくに真暗く、一寸先も見えないくらいで、前の人から離れれば置いて行かれてしまう、落伍でもしたら大変と一生懸命歩いたものでした。

夜が明けると行軍は出来ないで、空家になった民家に入り朝食の炊飯にかかるのですが、薪集めから飯の出来るまでが数時間かかって、その朝食が終わると昼食の支度、そして明日の行軍の準備と本当に忙しかったと思います。

明日は長沙に行くのだ、大きな街だから風呂にも入れるだろうと思つて到着して見ると風呂は無し、一同がっかりでした。武昌を出発してから何日経ったことだろう。私達兵隊には今何月何日ですら分からない。ただ命令のまま行動するのみです。

長沙を出発したのは七月の末だと思う。行軍行軍で着いた所は湘潭と言う街でした。ここで八月十五日終戦の命令を受けたのです。まさか敗戦になるうとは、中国大陸戦線の兵隊は誰もが信じられなかったことと思います。

南方戦線で守備隊の玉碎等があり完全に米軍に敗れた事実は報じられましたが、支那大陸の戦いには決して負け戦と言う実感は無かったです。

しかも本土が焼土化された実情は少しも知らなかったのです。

湘潭から元来た道を戻り徒步行軍、また一部は汽車輸送にて岳洲、武昌、漢口と戻り黄岡の捕虜収容所に着きました。ここで武装解除され、丸腰の身となり、中国軍隊の指揮官の命令下になり復員の日を待つ身となりました。捕虜生活はシベリヤ抑留者のような苛酷な強制労働等は無く宿舍周辺の除草、清掃ぐらいのものでした。

昭和二十一年六月、復員の知らせがあり黄岡収容所を出発、南京、上海へと移動して上海兵站に入り復員船を待っていました。

昭和二十一年六月六日乗船となり、祖国博多港に上陸、復員列車で上野―山形経由で懐しの故郷へ六月八日到着しました。途中の各都市は焼土と化していましたが郷里の山河は相変わらず自分を迎えてくれました。鉄道沿線の田んぼでは田植えの真っ盛りでした。

復員後は農家の後継者として農業に従事し、祖

国の再建のため、また食糧増産のために励み、昭和二十二年結婚し三人の子供に恵まれ、冬季節は埼玉県へ出稼ぎに行き今日に至っております。

私は第一線の戦闘要員ではなかったので敵の弾に当たるといふことはなかったのですが、あの寒い戦地で凍傷に掛かった人、あるいはマラリヤ等で苦しむ皆さんを衛生兵として看護したことを考えると、戦争が起した悲劇を二度と繰り返さないよう、平和の尊さを永遠に祈念しなければならぬと思います。

戦後六十余年、過ぎしあの日のことを思い浮かべて見ました。